

日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換 — 異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割 —

吉村 弓子・宮副ウォン 裕子

Exchanging Movie Critiques in a Virtual Classroom Linking Japan and Hong Kong - Movies' Effects and International Students' Roles in International Understanding -

Yumiko YOSHIMURA and Yuko MIYAZOE-WONG

要旨：小論は、豊橋技術科学大学の大学生と香港理工大学の日本語学習者による、日本語電子メール交換授業の実践報告である。参加者に興味のない話題やデリケートなトピックでは議論が深まらないという従来の問題点を克服するため、映画批評を取り入れた。また、日本人と非日本人との二極化を避ける目的で、留学生を参加させた。その結果、映画が緩衝材として機能し、留学生の存在が客観的・多文化的視座と日本語スピーチ・コミュニティの形成を実感させる成果をおさめた。

キーワード：映画批評 外国人留学生 ヴァーチャル教室 異文化理解 緩衝材 日本語教育

1. はじめに

日本の大学生と海外の日本語学習者との間にコンピュータネットワークを利用した交流が始まったのは、1980年代の終わりである。海外渡航をせずに異文化交流ができるため、時間と経費の節約になるのが大きな魅力である。また、チャットやテレビ会議のような同期性の活動とは異なり、時差や時間割を気にすることなく各自が都合の良い時に読み書きできる利点がある。これまでの作文やアンケート調査の交換という実践の成果は、次の3点にまとめることができる。

- 1) 日本語学習者にとっては、ネイティブの同世代の学生と生きた日本語を交換する機会が与えられ、日本語学習の動機が高まる。また、日本語使用量自体が増

える（中島 1993、石田 1998、才田 1997、1999、ハドソン 1999、板倉・中島 2001、中島・板倉 2003、吉村・豊田 2001、吉村 2003、吉村・宮副ウォン 2005、宮副ウォン・吉村 2005）。

- 2) 日本語教師養成課程の学生にとっては、日本語学習者と交流することにより一種の教育実習となる（石田 前掲、才田 前掲）。
- 3) 日本語学習者と日本人大学生双方にとって、文化に関する内容を扱うことで異文化や自文化の理解が深まる（板倉・中島 前掲、中島・板倉 前掲、Itakura 2004、Itakura et al 2004、吉村・豊田 前掲、吉村 前掲、吉村・宮副ウォン 前掲、宮副ウォン・吉村前掲）。

共通した問題点として、1) 学年暦の違い、2) 文字化け、3) 参加者の病気やサーバの故障等による中断、4) ネットワークへの負荷、5) 作文・アンケート調査の内容に対する参加者の否定的態度や表面的な議論が、指摘されている。1)～4) は実践を計画する段階で対処法を講じておけばある程度解消できる（吉村・宮副ウォン 前掲）が、5) を解決することはそれほど容易ではない。

内容に対する参加者の否定的態度や表面的な議論の具体例を示すと、中島（前掲）は、日本側参加者が昭和天皇の逝去について作文してきたのに対し、カナダ側参加者がどのように感想やコメントを返しているのか戸惑ったことを報告している。吉村（前掲）では、韓国系オーストラリア人の参加者が、日韓関係が良くないのは日本の植民地支配が関係していると思うかと質問してきたときに、留学生を含む日本側参加者は面識もない相手に本心は書けず、当たり障りのない返事をしたことを指摘している。Itakura（前掲）は、あらかじめマスメディアや教師から得た情報を基にして形成された学習者のステレオタイプは、それとは異なる日本人参加者の意見を目にしても修正し難いことを示唆している。

小論は以上の問題点の克服法という観点から、吉村・宮副ウォン（前掲）および宮副ウォン・吉村（前掲）の実践を再吟味することを目的とする。特に、映画批評の効果、および外国人留学生の役割に焦点をあて、交換されたメールとレポートおよび授業評価アンケートを定性分析する。

2. 映画批評交換の概要

2.1. 参加者のプロフィール

次のページの表に示した通り、日本と香港の学部生・院生で、豊橋技術科学大学には6カ国から来日した9人の外国人留学生を含んでいた。

	日本	香港
機関	豊橋技術科学大学	香港理工大学
学年	大学院1年 15人 学部3年 3人	大学院1年 34人
専攻	工学	日本研究
授業	異文化コミュニケーションⅠ 異文化コミュニケーションⅡ 言語と社会Ⅰ 日本語Ⅲ	多言語職場の日本語コミュニケーション
出身	日本 9人 ベトナム 2人 中国 2人 マレーシア 1人 タイ 1人 バングラデシュ 1人 ケニア 1人	香港 33人 台湾 1人
日本語力*	母語 9人 上級 8人 中級 1人	上級 27人 中級 7人

*日本語力：「上級」は日本語能力試験1級以上
「中級」は2級以上1級未満

2.2. 時期

2003年10月～12月、豊橋技術科学大学の第2学期、香港理工大学の前期であった。豊橋技術科学大学は3学期制をとっており、第1学期は4月～6月、第2学期は9月～11月、第3学期は12月～2月である。香港理工大学は前期・後期制であり、前期は9月～12月、後期は2月～5月となっている。

2.3. 各授業における位置づけ

豊橋技術科学大学の参加者は、リアルな教室ではクラスメートではなかった。目標・内容・対象年次を異にする4科目（いずれも選択必修科目）を受講する学生達が、1つのヴァーチャル教室で出会ったのであった。「異文化コミュニケーションⅠ」「異文化コミュニケーションⅡ」「言語と社会Ⅰ」は大学院共通科目（いわゆる教養科目）であり、日本人でも外国人留学生でも履修することが可能であった。「異文化コミュニケーションⅠ」「異文化コミュニケーションⅡ」は、科目名称が示すように異文化コミュニケーションの理解を目標とし、香港の日本語学習者とのメール交換を通していっそう理解を深めることを目的とした。「言語と社会Ⅰ」は日本語教育の概要を知ることが狙っており、学内の外国人留学生にインタビューするタスクを課す一方、海外の日本語学習者の一例として香港の日本語学習者と交流することとした。「日本語Ⅲ」は学部3～4年次の留学生を対象とした特例科目であり、日本映画を鑑賞することによって日本語と日本文化の理解を深めることを目指した。授業で観た映画について香港の日本語学習者と日本語で意

見交換を行い、各自の感想と日本語を吟味することを試みた。

香港理工大学の参加者は社会人大学院の新入生であり、「多言語職場の日本語コミュニケーション」というリアルな必修科目のクラスメートであった。この科目の到達目標は、多言語・多文化環境の職場や社交場面における日本語コミュニケーションを体験、観察、分析することを通して、自律的に問題解決ができるようになることであった。

2.4. タスク

次の手順で行なわれた。メールはすべて日本語で書いた。

1) 各参加者は、指定された日本映画2本（矢口史靖監督、妻夫木聡主演、2001年作品、『ウォーターボーイズ』。行定勲監督、窪塚洋介・柴咲コウ主演、2001年作品『GO』）のうち1本を鑑賞した。

各参加者が授業時間外に鑑賞できるように、両大学の施設で視聴覚資料を用意した。また、台詞を聞き取ることは難しくても文字を読めばわかる参加者のために、原作、ノベライズ、関連資料を備えて自由に読めるように準備した（「学習支援リソース」参照）。授業時間に内容の説明などは行わなかった。

2) 豊橋技術科学大学マルチメディアセンター（当時）技官に依頼し、参加者全員と教員2名、および技官1名を含むメーリングリスト（ML）を作成した。自宅と大学や職場で別々のメールアドレスを用いている場合は、受け取りたい全てのアドレスを登録できることとした。

3) 批評を行いたい映画の第1希望を各参加者に調査し、日本と香港の参加者のマッチングを行い、パートナーを発表した。

4) 自己紹介を交換してから映画の感想を少なくとも1回交換した。初めに香港側参加者が、日本のパートナー宛に映画についての意見をメール送信した。日本のパートナーはそれにコメントを返信した。各参加者は自分のパートナー宛てに「～さんへ」というタイトル（件名）でメールを書くこととしたが、宛先のメールアドレスはMLアドレスとした。つまり、参加者全員に配信されるため、パートナー以外の参加者でもそのメールを読むことができる仕組みである。各参加者は時間や日本語力に余裕のない場合は、自分宛に書かれたメールだけを読めば課題を達成できることになる。もし、余裕があれば、他のパートナー間の議論を読んで映画批評を複眼的に再考することができるわけである。

5) 香港側参加者は、メール交換に基づいてパートナーと自分の意見の相違を1,000字程度の日本語レポートにまとめた。草稿を提出した後、教員のコメントに従って推敲し完成稿を出した。完成稿は学生の編集委員がレポート集を編集してWWW上に掲載し、日本の参加者も閲覧できるようにした。

2.5. 成績評価

豊橋技術科学大学の「言語と社会Ⅰ」「異文化間コミュニケーションⅡ」は、課題の達

成を評価の15%とすることを予めシラバスに記載しておいた。「日本語Ⅲ」「異文化コミュニケーションⅠ」では、授業が始まってからボランティア参加を募ったもので、成績評価の対象とはしなかった。評価基準は、タスクの内容と締切を守っているかどうかとし、文字・語彙・文法の誤りは減点対象とはしなかった。

香港理工大学のシラバスには、レポートが成績評価の30%を占めること、レポートは編集・公開されることが書かれていた。レポートはメール交換に基づいて作成することが課題であったため、メール交換自体にも真剣に取り組まざるをえない仕掛けとなっていた。評価基準は、他者の意見の引用、同意・反対の表明、意見の調整を経た自分の意見、の3点が適切かつ論理的になされているかとした。

3. 映画批評交換授業の成果

3.1. 緩衝材としての映画の機能

『ウォーターボーイズ』は、男子高校生が文化祭でシンクロナイズド・スイミングの発表会を行うコメディータッチの青春映画である。数々の映画賞を受賞し、その後テレビドラマにもなった話題作である。

笑いに注目した批評が香港から来た（原文ママ。以下、学生の氏名はプライバシー保護のため仮名とする）。

「ウォーターボーイズの面白いところは以下の笑い元素があるからと思います。〈略〉映画の中に日本人がユーモアをした場面に香港人も感じさせて、よく笑ったそうので、日本人と香港人もユーモアへの考え方はたぶん似ているでしょう。（エンジェル@香港）」

ラジカセが火を噴いて髪の毛に燃え移り、慌ててプールに飛び込むというシーンに関して、日本のパートナーが確認し、笑いの感性についてコメントした。

「日本人は、佐藤(玉木宏)が髪の毛を燃やしてしまう所に笑いを感じますが、中国の方は、ああいった体を張った笑いについてどういった印象をお持ちでしょうか？〈略〉日本の笑いが、世界のどこまで通用するかといった企画を昔テレビでみたことがあります。日本の留学生が、中国の方々に非常に迷惑をかけたというニュースを聞いて、同じ日本人として申し訳ないです。〈略〉映画という媒体を通して、異国のものどうしが意見を交換することはすばらしいことです。このメール交換を通じて、互いの国の感性の違いや共通点を感じとることができれば幸いです。（山本@日本）」

香港から返事が返ってきた。

「香港人も「佐藤(玉木宏)が髪の毛を燃やしてしまう所」のシーンを笑いましたよ。〈略〉たぶん香港人と日本人の生活環境が近くて、生活の共通点がある上、日本の

ことがある程度認識しているので、日本人のユーモアがよく感じました。(エンジェル@香港)」

下線部が指しているのは、まさにメールを書く前月の2003年10月、中国西安市の西北大学で日本人留学生が行った寸劇が大問題となった事件のことである。つまり、この日本人参加者は、事件の背景にユーモア感覚の文化による相違があるのではないかと考え、それを議論したかったわけである。しかし、映画のシーンを緩衝材として利用した後に核心について自分の意見を述べたのである。もし、映画批評ではなく西安の事件そのものについて議論していたら、感情的な意見の応酬になっていた危険性も否定できない。当時、発端となった寸劇の状況は詳細には伝えられず、その余波であるデモや学生寮襲撃、強制送還などがセンセーショナルに報道されただけに、共通の議論の立脚点を見いだせなかったのではないだろうか。

もう1編の映画『GO』は、在日コリアンの男子高校生と日本人の女子高校生の恋愛映画である。在日コリアンの差別問題やアイデンティティーという重苦しくなりがちなテーマを、軽妙に、爽快に、前向きに描いて、2001年度日本アカデミー賞8部門で最優秀賞を受賞した作品である。

主人公2人はデートを重ね、ついに少年は在日コリアンだと告白するが、少女は「怖い」と拒絶する。韓国や中国の男性とつきあうことを、父親に禁じられていたからである。この場面は、華人である香港の学生には大変衝撃的であり、異口同音に質問が来た。

「この映画はどれほど日本社会の事実を映しているのか、桜井と彼女の父に似ている日本人がどれほどいるのか、と疑問します。(アン@香港)」

日本からの反応は様々であった。

「私の周りには在日韓国人や在日朝鮮人といった人はいません。ですから、この映画を見て初めて知ったこともたくさんありました。たとえば、朝鮮人の民族学校の存在や在日の人々に対する差別とかです(鈴木@日本)」

「悲しいことに、映画と同じことが現実には起こっているようです。チマチョゴリを着た学生が暴行を受けたり、民族学校に嫌がらせの電話やメールが届いたというニュースを聞くたびに、何故そんな事をするのか理解できず、悲しい気持ちになります。(渡辺@日本)」

「会社の面接などで韓国人だから、という理由だけで不合格になってしまうというケースも残念ながらあります。この日本人の“島国根性”は治すべき事ですね。(佐藤@日本)」

香港からは、むしろ日本人を庇うような、別の視点からの意見が寄せられた。

「彼らは日本のG N Pの一割を稼ぎ出しているという計算もあります。いずれにしても、「世界のマイノリティの中で唯一、例外的な成功を収めている人たちである」と書かれていました。〈略〉私がW e bサイトを検索したところ「1980年代半には日本人との国際結婚をする韓朝鮮人の人数が過半数をこえた」という統計も見られました。〈略〉アメリカは人権を一番大切にするとずっと自称していますが、実は人種問題の激しい国と世界の噂になった。ですから、直すべき対象は日本人だけではなく、あらゆる根拠なく他人を差別する人々ですね。それに、佐藤さんのメールに書いてある「島国根性」に対して、私の考え方も言わせていただきますでしょうか。日本人の中に自分のこと島国根性の人間だと思ひ込みすぎる傾向があるかなと思います。昔はそうだったかもしれませんが、国際交流によって、海外からの情報が流入するに従って、国際的視野を持つ方も沢山いると私は思いますね。（エリー@香港）」

もし、映画を介することなく「日本には民族差別があるか」というテーマで議論していたら、日本人に対する批判が加熱したり、差別の現状を知らない日本人がその批判を理解することなく否定したりして、議論が咬み合わなかった可能性もある。

以上見てきたように、深刻なテーマも、映画について意見を交換することで映画が緩衝材として機能し、議論が行いやすくなっていたことが認められる。

3.2. 客観的・多文化的視座を持たせる留学生の役割

『ウォーターボーイズ』では、水泳部、バレー部、空手部など多くの部活動が登場することについて、香港から質問がありパートナーの丁寧な返事によって理解を深めていた。

「一般香港中学校には、バレーボール場しかありません。水泳プールは、まったくありません。日本の映画に、学校に水泳プール、サッカー場などをよく見たが、本当は、そうでしょうか？（フィリップ@香港）」

「中学校にあがってからは部の種類が多くなります。それはほとんどの学校が、生徒は部活動をしなくてはいけないという校則を持っているからです。部の種類も多いですし部員の数も多いです。ですからフィリップさんの学校がバレー部しかなかったというのは大変驚かされました。部活の種類は……〈略〉（竹田@日本）」

「私が、日本中学に、色んな施設があることは信じなかったんですが、田中さんが説明を貰ったら、これは間違いありません。やっぱり、日本の中学生は、香港より、幸せです。いろいろの部活があって、自分が興味を持っている活動に参加して、嬉しいです。香港の場合は、部活があまり、ないです。先生は、いつも学術大切性を強調しています。運動がうまくやっても、しょうらいの仕事は関係がない、給料が得ない。基本的に香港の学生たちは大学に卒業するまで、受験のため、生きているんです。（フィリップ@香港）」

同様の議論は、香港の参加者とタイの留学生の間でも交わされた。

「タイでは、放課後になったら、みんながスポーツなどをして遊んでいます、部活と言ったものはありません。プールや体育館などを自由に使えますが、ボールは自分で持ってこなければなりません。それに、タイでは文化祭もありません。学生が集まって何かを一緒にするのはスポーツ大会や開校日の展示会くらいかな。(ラッチャニー@日本)」

日本では、受験勉強に明け暮れる高校生活を連想しがちであるが、香港やタイの現状と比較してみれば部活動の充実ぶりを認めることができよう。

『GO』について批評するグループでは、日本での差別体験を尋ねる質問が香港から日本の留学生に投げかけられ、次のように答えていた。

「多くの先生方に幸いなことに留学生ではなく、学生という目で見られることが多く、ほめられたり、しかられたりことがあります。それは非常にうれしく思っています。しかし、区別されたことを受けた学生のことにもたまには耳にします。例えば、アルバイトの募集のときに留学生であるため、採用されてもらえなかつた友達があります。(モハマド@日本)」

「日本は排他的な社会だと言う人が多いのですが、僕とよく付き合ってる仲間たちからはこういった考えはないと思う。年長者達と話すことも良くあるのですが、彼らからは時々話の中で排他主義的言い方とかが出てくることもある。日本で差別がよく現れるのはアルバイトを探すとき。(ウィリー@日本)」

また、少年と少女がつきあい始めたとき、少年「杉原」は民族名「李」を隠し、少女「桜井椿」は、「椿」があまりに日本的だからと嫌って「桜井」としか教えなかった。そのことについて、次のような意見交換があった。

「杉原と桜井は名前さえも相手に教えない事に関して、私が悲しみます。名前や国籍はアイデンティティです。自分の名前が嫌いなら、自分の身分と存在を認めない事と違いがないと思っています。イシャムさんはどう思いますか。(ディック@香港)」

「自分の名前はやはり自分の Identity 確かです。でも、もし自分の名前はテロの名前と似ているならば。どう考えますか。(イシャム@日本)」

その留学生の名前は「イシャム・ビンハシム」であるが、「ビン」はアルカイダのテロリスト「ウサマ・ビンラディン」を連想させてしまう恐れがある。そこで、航空券やホテルの予約時には、危険人物であると思われないように「ビン」を隠して「イシャム・ハシム」を使っている。つまり、自衛のために自分の名前を隠さざるを得ないこともある、と自らの体験から告げているのである。

上瀬（2002）では、2項対立のグループでプロジェクトをするのはステレオタイプを生みやすいので危険であり、多様な背景を持つグループに接触させることが望ましいと主張している。Kramsch（1993）も「第3の場所」が異文化理解の議論に客観性をもたせるとして重要視している。このような主張を実証するように、多様な国籍や文化を背景とする参加者が各自の母文化や異文化の視点から映画に表れた日本文化を論じることにより、教師を含めた全参加者が多文化的視座を持つことができた。

3.3. 日本語スピーチ・コミュニティの拡がりを実感させる留学生の役割

日本人参加者は授業評価アンケートに、外国の人と日本語でこのように密度の濃い交流ができるとは思ってもみなかった、これからも交流を続けたい、香港に行ってみたい、他の地域の人とも交流したい、と書いていた。香港側参加者は、これまで日本語による電子メールは仕事や私用の連絡のためしか使ったことがなかったが、このプロジェクトを通して、未知の人と密度の濃い映画批評討論ができ親しさが増した、日本語の実際使用機会が質的・量的に向上したと評価している。パートナーに日本語非母語話者の留学生がいたことに関しては、不満が聞かれなかったどころか、次のようなメールまで送られてきた。

「グエンさんはベトナム人で、日本で勉強しています、私は中国人で日本で勉強してきました、今2人で日本語で文通をしていることは素晴らしいことだと思いますか。（ピーター@香港）」

日本の留学生の中には、日本に長くいるのに日本語が下手で恥ずかしいという返事を出した人も何人かあった。工学専攻の国費留学生は、日本に来てから日本語学習を始めることが多いので、海外在住者が趣味で日本語を上達させるなど、想像もしなかったと言う。今後は、日本語がペラペラですね、とほめられることに満足せず、もっと上達しなければと感じたようであった。

どの参加者も、電子メールがつかないだヴァーチャル教室で日本語スピーチ・コミュニティの世界各地での拡がりを実感し、多様な文化背景をもつメンバー間の異文化交流を深めていた。

4. 今後の課題と展望

以上述べたように全般的に高い評価を得た活動であったが、香港で行った授業評価アンケートでは、以下のような否定的な回答があった。1) 時間がかかりすぎて、負担が重すぎた。2) 表面的な討論だけに終始し、時間的負担の割りに学習効果がなかった。

1) と回答したのは、日本語能力が中級の参加者だった。日本語能力試験でいえばやっと2級に合格したレベルである。このレベルで映画批評を交換し深い議論をするのは、確かに容易ではない。しかも、最終エッセイで日本語能力が上級の参加者よりも良い成績を取ることは初めから期待しにくい。そのため、負担に見合うだけの満足感が得られ

なかったものと推察できる。必修科目としては、比較的能力が低い参加者たちにどのように動機付けを与え、学習を継続させ、達成感を味わわせることができるのか、難しい問題である。

2) は、表面的な質問しか投げかけなかったために深い答を引き出せなかったとも言える。たとえば、『ウォーターボーイズ』で主人公がウジウジした男の子であるのに対して、女友達は空手の強いハキハキした女の子であったのが、日本の男女のイメージと違うという感想が香港側から出た。それに対して、日本の男が女の尻に敷かれている現状をよく表しているという返事が日本人参加者からあった。この議論はここで終わってしまったが、さらに突っこんで質問してみれば展開は変わっていたかもしれない。たとえば、日本の女性は強いというが、会社の初任給は同学歴でも女性の方が安く、政治家も少ない。香港ではそうではない。日本の女性は本当に強いといえるのか。このように迫ってみれば、日本側でも男女の別の側面について回答することができただろう。この点は、課題設計や活動運営に携わる教師の役割として、今後検討すべきところである。

以上見てきたように、映画批評という方法は緩衝材としての効果をあげていたが、表面的な議論に終わる可能性も否めない。しかし、ヴァーチャル映画批評のメリットを効果的に活かせば、自由作文やアンケート調査では達成しにくい議論の深化に導けることが示唆されている。一方、外国人留学生の役割は、客観的・多文化的視座と日本語スピーチ・コミュニティーの形成に大きく貢献していた。この実践は日本語教育、国語教育、異文化理解教育、留学生教育、グローバル教育を統合する活動であると評価することができよう。

注

小論は、異文化間教育学会第 25 回大会（2004 年）における、ケース／パネル発表「電子メール交換授業による異文化間理解－日本・香港間の〈アンケート調査〉と〈映画批評〉の実践－」の一部に加筆修正したものである。

参考文献

石田敏子編、1998、『コンピュータ通信を利用した日本語通信教育及び教師養成のための試行的研究』、平成 7 年度文部省科学研究費補助金一般研究（C）および平成 8・9 年度文部省科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（課題番号：07680307）。

板倉ひろこ・中島祥子、2001、「IT 時代における日本語教育－香港－鹿児島間の電子メール双方向型プロジェクトワークの試み－」、『世界の日本語教育（日本語教育事情報告編）』、6 号、227～240 ページ。

上瀬由美子、2002、『ステレオタイプの社会心理－偏見の解消に向けて』、サイエンス社。

才田いずみ編、1997、『コンピュータ通信によるコミュニケーション型日本語学習支援システムの研究』、平成 7・8 年度文部省科学研究費補助金国際学術研究（共同研究）研究成果報告書（課題番号：074044002）。

- 才田いずみ編、1999、『インターネットを利用した日本語多技能学習支援システムの研究』、平成9・10年度文部省科学研究費補助金国際学術研究（共同研究）研究成果報告書（課題番号：09044001）。
- 中島和子、1993、「パソコン通信を活用した日本語教育」、『日本語学』、第12巻第13号、22～30ページ。
- 中島祥子・板倉ひろこ、2003、「日本語学習者と母語話者の異文化理解の形成」、『異文化間教育』、17号、87～95ページ。
- ハドソン遠藤睦子、1999、「日本語の書き教育におけるインターネット使用の一例」『第2回日本語教育とコンピュータ国際会議プロシーディング』、205～209ページ。
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子、2005、「ヴァーチャル教室の「日本の社会・文化」にかかわる意見の調整」、リタ高橋李玉香・宮副ウォン裕子・山口敏幸・マギー梁安玉（編）、『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク 第2巻 日本語教育』、香港城市大学・香港日本語教育研究会発行、281～292ページ。
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子・板倉ひろこ・中島祥子、2004、「電子メール交換授業による異文化間理解—日本・香港間の〈アンケート調査〉と〈映画批評〉の実践—」『異文化間教育学会第25回大会発表抄録』、41～42ページ。
- 吉村弓子、2003、「日豪メール交換によって日本の大学生は何を学んだか」、『第12回小出記念日本語教育研究会予稿集』、30～35ページ。
- 吉村弓子・豊田悦子、2001、「インターネットでつなぐ日豪の教室—豊橋技術科学大学とメルボルン大学のメッセージ交換の試み—」、『第10回小出記念日本語教育研究会予稿集』、21～26ページ。
- 吉村弓子・宮副ウォン裕子、2005、「ヴァーチャル教室における日本語交流—電子メール交換授業のすすめ—」、リタ高橋李玉香・宮副ウォン裕子・山口敏幸・マギー梁安玉（編）、『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク 第2巻 日本語教育』、香港城市大学・香港日本語教育研究会発行、172～181ページ。
- Itakura, H., 2004, "Email projects as intercultural learning experiences." *System*, Vol. 2/1, pp. 37-51.
- Itakura H., Nakajima S., Yoshimura Y., Miyazoe-Wong Y., 2004, "Changing cultural stereotypes through e-mail assisted foreign language learning system." Paper presented at *The Workshop 2004*, organized by The Sydney Network for Language and Culture, (University of Sydney)
- Kramersch, C., 1993, *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

学習支援リソース

『ウォーターボーイズ』関連

矢口史靖、2001、『ウォーターボーイズ』、角川文庫。

フジテレビジョン・アルタミラピクチャーズ・東宝・電通、2001、『映画「ウォーターボーイズ」WebSite』、<http://www.altamira.jp/waterboys/index.html>、2008年11月6日参照。

埼玉県立川越高校水泳部、『埼玉県立川越高校水泳部ホームページ』、
<http://www.kawataka.com/ja/index.htm>、2004年5月9日閉鎖。

『GO』関連

金城一紀、2003、『GO』、講談社文庫。

テレビ東京、2001、「GO」、『CINEMA STREET』

<http://www.tv-tokyo.co.jp/telecine/cinema/go/index.html>、2008年11月6日参照。

NHK、2002、『日本人はるかな旅』(DVD)、第1巻～第8巻、NHKソフトウェア。

執筆者紹介

吉村弓子

所属：豊橋技術科学大学 留学生センター

Email：yumiko@tut.ac.jp

宮副ウォン 裕子

所属：桜美林大学大学院 言語教育研究科

Email：miyazoey@obirin.ac.jp